

2023 年度沖縄文化協会東京支部公開研究発表会

シンポジウム（公開）要旨集

映像から考える

沖縄・久高島のイザイホー

2023 年 10 月 28 日（土）9:30～17:30

学習院大学 西 5 号館 202 教室

参加自由 資料代：500 円 懇親会：同大学内で予定

イザイホーの映像が以下の手続きでご覧いただけます。

岡田一男監督作品『沖縄・久高島のイザイホー』（2022 年版）は、10 月 1 日から 10 月 30 日まで、無料公開いたします。このシンポジウムに合わせて各自ご視聴ください。

視聴の方法は、フェイスブックの「イザイホープロジェクト」で検索してください。時期限定ですので、10 月 1 日以降この検索ページに、映画を公開しているサイトの URL を掲載いたします。

フェイスブック「イザイホープロジェクト」 <https://www.facebook.com/izaiho/>

なお、オンラインで視聴されるのが難しい場合は、DVD のご用意もごさいますので、必要な場合はこの要旨集の最終頁にある「連絡先」にお申し出ください（SMS 〈ショートメール〉なら助かります）。

ごあいさつ

この企画を計画してから一年以上経過して、ようやく実現の運びとなりました。

東京支部のメンバーには、長年に渡って、久高島年中行事研究会を組織し、映像民俗学による久高島の年中祭祀を記録し続けてきた研究者たちがおります。そしてその成果を「久高島年中行事映像データベース」にまとめていましたので、久高島のイザイホーをテーマにシンポジウムの開催につながり、コロナ禍にあっても実現に向けてスタートした次第です。

学習院大学を会場としてお借りするにあたっては、文学部の赤坂憲雄先生に大変お世話になり無事開催に漕ぎつけることができました。篤く御礼申し上げます。

沖縄文化協会東京支部シンポジウム実行委員会委員長 竹内重雄

〈シンポジウムタイムテーブル〉

第一部

9：30～12：30 映像と発表

〈登壇者〉

岡田一男、北村皆雄、石村智、小山和行、竹内重雄、三島まき、乾尚彦

12：30～13：30（昼食と休憩）

第二部

13：30～15：30 研究発表

15：30～16：00（休憩）

16：00～17：30 全体討論

懇親会（予定）

18：00～20：00 学習院大学内（詳細は後日沖縄文化協会ホームページに掲載）

〈要旨集目次〉

第一部 総論		頁
映像でふりかえるイザイホー		3
第二部 各論		
民俗誌／民族誌映像のアーカイブに関する諸問題	石村 智	5
イザイホーは成巫儀礼なのか 一島の祭祀か王府の祭祀—	乾 尚彦	6
『久高島のイザイホー』と映像	岡田一男	7
私と久高島の57年—民俗誌映画を撮る—	北村皆雄	8
〈イザイホウ〉の本義を考える—〈山の神〉と〈海の神〉と—	小山和行	9
久高島、生業とイザイホー	竹内重雄	10
『おもろさうし』における「 <small>あがるいのうぶぬし</small> 東方大主」		
—沖縄久高島の年中行事、イザイホーの映像からの一考察—	三島まき	12
用語解説	乾 尚彦	14

第一部 総論

映像でふりかえるイザイホー

主として1978年におこなわれたイザイホー及びそれに関連する映像をみながら、その祭祀の意味、本義について考えていきたい。

イザイホーの本祭そのものについては、これまでも多くの記録がある。しかし、その背景として久高島の年中行事、社会、生活を考えることは不可欠であり、それが琉球王府や南西諸島、日本全体、アジアとどう関わるかについての視野を持つことも必須であるが、それがこれまで十分おこなわれてこなかったのではないかと我々は考えている。

そこで、第一部では、イザイホーの祭祀の詳細を映像で検討していくとともに、それが久高島の年中行事の中でどのような位置づけにあるのかを映像を用いて紹介していくことにしたい。

具体的には、〈八月マティ〉の8月10日に、イザイホーと同じく午年のみに行われる男性の〈ナーディキー（名付け）〉があり、本祭の一ヶ月前には〈ウガンダティ（御願立て）〉をスタートとして、一ヶ月におよぶ〈スアキマーイ（ウタキ廻り）〉がおこなわれる。また、イザイホーの直前には男性が夜籠もりする〈アミルシ〉、直後にはイザイホー祭祀集団の再編成の祭祀を含む〈フバワク〉がおこなわれる。

第一部では、これらを時間の経過とともに示しながら、映像から明らかになるイザイホー祭祀の問題点を指摘することにした。

ここで紹介する映像は、下記の映像記録を抜粋したものである。

1 東京シネマ新社による記録

制作 伝統文化財記録保存会（代表・理事長：本田安次）、下中記念財団 EC 日本アーカイブズ（理事長：下中邦彦、所長：岡田桑三）、東京シネマ新社
制作資金は放送文化基金特別プロジェクトの助成金（伝統文化財記録保存会）、下中記念財団、東京シネマ新社が分担し、制作実務は東京シネマ新社が担当

監督 岡田一男

撮影 谷口常也、草間道則
堀田泰寛（一部）、高山永吉（一部）

演出補、録音 後藤雅毅

録音 羽田野泰志、小松一之

オリジナルメディア 16mm フィルム：フジカラーA(エース) 8527・フジカラーリバーサル TVRT400-8425

撮影機材 エクレール NPR 3台、エクレール ACL 1台、予備カメラ：ポリュー・ボレックス各1台

録音機材 ナグラ IV 2台、ステラヴォックス SP 1台

撮影期間 1978年11月～12月、1978年9月、1979年9月

総時間 約 17 時間 (2K-Full デジタル化完了分)

2 ヴィジュアルフォークロアによる記録

2-1 1966 年のイザイホー

監督 北村皆雄

撮影 撮影 市川雅啓 北村皆雄

オリジナルメディア 16mm フィルム (フジ白黒)

撮影機材 ボレックス 2 台

撮影期間 1966 年 12 月～1967 年 1 月

2-2 1978 年のイザイホー、年中行事その他

制作 久高島映画製作委員会

撮影監督 北村皆雄

撮影 大久保敏、杉山昭親 (イザイホー)、北村皆雄 (送魂式)

オリジナルメディア 16mm フィルム (コダック)

撮影機材 アリフレックス 2 台

撮影期間 1978 年 1 月～1978 年 12 月

総時間 約 7 時間 45 分 (2023.7.23 整理済分)

2-3 1982 年から 1984 年にかけて年中行事その他

監督 北村皆雄

制作 三浦庸子

撮影 柳瀬裕史、須賀次郎 (水中撮影)

学術協力 赤嶺政信

オリジナルメディア 3/4 インチビデオテープ、Betacam、TC-20 (VHS-C)

撮影期間 1982 年 12 月～1984 年 7 月

総時間 約 57 時間 30 分

3 東京文化財研究所所蔵のイザイホー映像

3-1 FLM8-16-1～16-3

制作 琉球政府文化財保護委員会

総括・監督 新城徳祐

オリジナルメディア 8mm フィルム (モノクロ、無声)

撮影期間 1966 年 12 月

総時間 3 巻×13 分

3-2 FLM8-17

制作 東京文化財研究所

撮影 大城学

内容 イザイホー 4 日目：アrikヤーの綱引き、アサンマーイ、グキマーイ

オリジナルメディア 8mm フィルム (カラー、モノラル)

撮影期間 1978 年 12 月

総時間 20 分

第二部 各論

民俗誌／民族誌映像のアーカイブに関する諸問題

石村 智（国立文化財機構 東京文化財研究所）

映像というメディアが歴史に誕生してからまだ百数十年しかたっていないが、民俗誌／民族誌の記録法として今や欠かせないものとなっている。中には現在すでに絶えてしまった芸能・技術・風俗慣習（＝無形文化遺産）が映像の形だけで残されているものも数多くあり、そうした映像は歴史資料としても貴重な価値を有する。しかしそうした映像をアーカイブ化し、持続的に保存・活用するためには以下のような多くの課題がある。

- ・ 多様なメディア

映像を記録するメディアは、フィルムに始まり、磁気テープ、光学メディア、ハードディスクなど多様である。問題は、これらのメディア自体の物理的な耐用年数と、それを再生する機器の保全である。特にアナログメディアのデジタル化は急務である。

- ・ デジタルデータの保存

しかしデジタル化すれば永久にデータを保存出来る訳ではない。DVD や Blu-ray などの光学メディアにも耐用年数があるが、ハードディスクはもっと耐用年数が短く、5 年ほどと見積もられている。結果的に、デジタルメディアの方がアナログメディアよりも保存コストがかかるという状況（デジタルジレンマ）となっている。デジタルデータの保存は、定期的に新しいメディアにコピーしていく（マイグレーション）しか、現在のところ有効な手段はない。

- ・ 持続的なアーカイブの管理体制

民俗誌／民族誌映像を持続的にアーカイブする体制を有する組織が少ないことも大きな問題である。特に地方公共団体や民俗文化財の保存会が制作した記録映像や調査報告書の付録の映像を体系的に収集することが重要であり、公的な機関がこうした映像のアーカイブを行うことが求められている。

イザイホーは成巫儀礼なのか 一島の祭祀か王府の祭祀か

乾尚彦

イザイホーが成巫儀礼であるということは、これまで疑われることはなかった。それは研究者においても、久高島の人たちにおいても同様である。祭祀過程をみれば、いかに新しい神女が生みだされるか、その様子が順を追って示されている。イザイホーを経ることで家庭の主婦はナンチュと呼ばれる神女に生まれ変わる。しかし、イザイホーという祭祀の目的ははたしてそれだけだったのだろうか。

久高島には、イザイホー以外にも、神人の誕生あるいはその通過儀礼に関わる祭祀がいくつもある。フバワクでおこなわれるスォージヤクの就任式、スァムトゥの退任式、粟の初穂祭でおこなわれるスァムトゥ就任式、マーミキグワでおこなわれるスォールイガナシーの就任式などである。神人の誕生やその通過儀礼は、島の大きな祭祀の時期におこなわれてきた。こうしたことは沖縄の他の地域にも共通し、例えば宮古島狩俣で新たな神女を生み出すイダスカンと呼ばれる祭祀は、ウヤガンと呼ばれる大きな祭祀のなかでおこなわれるものだった。

こうしたことを考えると、イザイホーの場合も、成巫儀礼とは異なる祭祀の目的があったのではないかという疑問がわいてくる。上述の神人の誕生や通過儀礼はほぼ毎年あるのに、久高島では神女の就任式が12年に一度となっているのも奇妙である。

こうした疑問を解くヒントになるのが、関東や東海に多くみられる浜降りの神事である。規模の大小は異なるが様々な例があり、開催が数年に一度という例も少なくない。鹿島神宮の御船祭は12年に一度、イザイホーと同じ午年におこなわれる。毎年でなくてよいのは農耕儀礼ではないからで、浜に降り、あるいは海上に出ることで、海から、あるいは海を越えて呼び寄せる霊力で神霊を強化する祭祀と考えられる。沖縄でヤマトの浜降りと比較すべきは集落あげて海岸でユー（豊饒などと説明される）を招く祭典で、ユークイ、ウンジャミなどと呼ばれている。これらはヤマトの浜降りと原点は共通すると私は考えている。イザイホーで東方遥拝からアrikヤーにいたる一連の祭祀は、詞章の上では古い神々を迎えて首里に送るものだが、それはユークイが変容したものと理解できる。琉球王府がおこなった大規模な浜降り、それがイザイホーだったのではないかというのが私の仮説である。王府の消滅後は島の祭祀となり、成巫儀礼だけが残ることになったのではないだろうか。

イザイホーも、詳細を検討すると王府の祭祀であることの痕跡をいくつも指摘できる。それは、ニブトゥイの歌やアrikヤーが首里を指向することにあらわれているし、歌謡のなかに登場するマチンシュラやアケシノを、それぞれ聞得大君、首里オオアムシラレと比定すれば、そこにかつての王府祭祀の姿を見いだすことが出来る。

『沖縄久高島のイザイホー』と映像

(文化財映像研究会・東京シネマ新社・公益財団法人下中記念財団) 岡田 一男

岡田一男らによる 1978 年執行のイザイホーの 16 mm フィルムによる記録は、1979 年に『沖縄久高島のイザイホー』第一部・第二部、102 分にまとめられた。伝統文化財記録保存会と財団法人下中記念財団 EC 日本アーカイブズが、クレジットされているが、実務を担った東京シネマ新社の三者が、制作費を分担した。諸事情により実現はみななかったが、国際学術映像収集運動、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ (EC フィルム) への収録を前提としていたので、オリジナル撮影素材フィルムと対応する音源の大部分が保存されてきた。2021 年 4 月から岡田は、東京文化財研究所無形文化遺産部音声映像記録研究室の石村智、沖縄民俗祭祀研究者で久高島年中行事データベース化に関わってきた三島まきと三者で、非営利の任意団体、文化財映像研究会を立上げ、残存全素材 (約 17 時間分) を高画質デジタル化し、完成作品の DCP 復元にあたっては、全 300 カットを 16:9 画面にトリミングし、聴き分けられる神謡は、原音を書起こし、現代語訳と共に字幕で付した。今後は、「イラブー漁」の整理と、久高島方言による証言など新規撮影を含めた『沖縄久高島のイラブー』作品化、個々の儀礼の頭から尻まで、省略無しアーカイブ化、データベース化を目指している。

『沖縄久高島のイザイホー』は、広義のドキュメンタリー映画の範疇には入るが、EC フィルムの規範としていた方法論、ひとつの未解明の事象=テーマを体系的に科学的な記録として整理し、集積し提示していく、「科学的ドキュメンテーションフィルム」の典型例を模索する中で製作したもので、ドキュメンタリー映画においてよく行われる、作家の主張に従って作成された構成に、記録した映像を恣意的に貼り付けていく作業を厳しく拒絶した作りになっている。

イザイホーを未解明の事象として捉えていたので、基本を無省略記録とした。カメラマンの自由な移動も困難と予測、音声と同期できる水晶発振器定速モーターのノイズレスカメラ 16 mm カメラを 4 台用意した。対応する録音機は 3 台であった。当時のカメラは 400ft (122m) と凡そ 11 分ごとにフィルムの詰替えが必要であり、手探りでフィルム交換のできる助手をカメラマンにつけた。御殿庭に 3 基、外間殿に 1 基、撮影台を用意し、久高ノロ殿内では、道を隔てた家の納屋の屋根に登らせていただいた。

上述は、本祭 4 日間の陣容で、御願立の数日前からフバワクの翌日まで 50 日近く 16 mm カメラ 1 台と第一カメラマン、第二カメラマンを助手とし、演出補の 3 名が常駐し、島内・村内の地理習熟と、外間ノロウメーギや、彼女自身ヤジクであった民宿の女主人から、撮影者としてやって良いこと、いけないことの学習に努めた。そしてイラブー漁関連の撮影を続け、燻製材の準備、イラブーのガマでの採捕、約一週間にわたる燻製作業の過程、家庭でのイラブー汁調理過程を記録した。イラブーの収穫感謝の儀礼とその準備は、翌年に補足撮影している。

私と久高島の 57 年—民俗誌映画を撮る

ヴィジュアルフォークロア 北村皆雄

私が最初に久高島を訪れたのは 1966 年、まだアメリカの統治時代で、パスポートを必要とした。イザイホーの撮影に、16 ミリムービーカメラ「ボレックス」2 台を抱え、馬天港から荒れる海を渡った。戦前から調査している鳥越憲三郎さんが、久高の生き字引である西銘シズさんと繋げてくれた。内間待壺さん宅の久高一のウムリングワ（ユタ）と言われたマック婆さんの部屋で、1 ヶ月を過ごした。イザイホーを全て記録したが、東京に帰って編集してみると何かしっくりこなかった。3 年後、オナリ神信仰の姉と弟のシーンのフィクションを挿入することで、ようやく『^{カベール}神屋原の馬』を完成させた。カベールの馬とは、イザイホーに

参加して^{カミンチュ}神女となった女性が幻視する馬で、男性の最高神スウォールイガナシーの化身とされる。当時の私はイザイホーを忠実に記録するというよりも作品志向が勝っていた。その土地に暮らす人の〈心意現象〉〈内的なもの〉を表現したいと考えた。私の中で映像民俗学への思いが強くなったのは、4、5 年後のことである。

イザイホーから 10 年後の 1976 年に『神の島 女たちの 10 年—沖縄久高島—』という TV ドキュメンタリーを作った。一人前と認められた女性たちが 10 年後にどう変わったのかを追った。

1978 年、私にとって 2 回目のイザイホーの年を迎え、年中行事の全てを撮影しようと考えた。カメラマン大久保敏さんに 1 年間沖縄に滞在してもらい、久高島を撮影してもらった。16 ミリムービーカメラ「アリフレックス」で、旧暦で行われる大晦日の行事から、ほとんど知られていない 30 ほどの祭祀を撮影した。私も主だった行事には駆けつけた。豊穰祈願

の祭り^{ナナ}七マティヤ、ニライカナイから神を招く「ハンジャナシー」、さらにイザイホーと対応する男の 12 年に一度の「ナーリキ（名付け）」が印象に残る。12 月のイザイホーの撮影にはカメラマン杉山昭親、三浦庸子、小川克巳、スールン・ホアスらが参加した。この撮影は持ち出しの自主制作のため同時録音による撮影体制を組めなかった。そのことが 1982 年～1984 年に、撮影と録音が同時に可能なビデオカメラで、もう一度撮影することにした。

琉球王権が絡む 1 月の「麦の初穂儀礼」、8 月 11 日の「ヨーカビ」、1 年で最も悪い日に女性だけがフボー御嶽の中で歌い舞う。10 月の香炉を引き継ぐ「スウォールイガナシーの交代式」、12 月の「フバワク」では 70 歳を迎えたタムトゥの退役を撮影した。

現在、私は女性に祈られる男たちの漁業生活を追っている。北はトカラ列島小宝島のイラブウナギ漁、南へ追い込み漁を持って出稼ぎに行った台湾の久高漁民を追いかけたら、私の久高島のドキュメントを終わりにしたい。

〈イザイホウ〉の本義を考える

－ 〈山の神〉と〈海の神〉と－

小山 和行（沖縄文化協会）

〈イザイホウ〉の本祭（旧11月15日）に先立って、1ヶ月前に〈御願立て〉が行われ、〈タキマーイ〉へと続く。各ムトゥの始祖（ムトゥ神）や、ウタキの〈ウプティシジ〉に対する祈願と説明される。

1978年の〈御願立て〉は外間ノロ家、久高ノロ家、シラタルの宮、大里家、ウブンシミ家の順に二人のノロの領導によって行われている。その時の祈願の詞は唯一、比嘉康雄氏の報告として残されている（資料集収載）。久高島では〈ムトゥ神〉を考える場合、たいへん複雑な問題に直面する。前述の大里家は、本祭の間近い日に〈ヤマガミのクジワイ〉を行う所であり、三女以下のイザイニガヤーの所属ウタキを米占する重要なムトゥである。本祭初日の久高ノロ家で謡われる〈ウムイ〉にも〈クンチャサの根神御シジ〉は登場する。

〈ヤマガミのクジワイ〉によってウタキが決定されると、根神のシジ（始祖）である〈クンチャサのノロ〉に対し、根神が報告の祈願をするという。

比嘉康雄氏は1978年直後の〈タマガエー〉（イザイホウ祭祀集団の加入者）の一覧を外間側、久高側に分けて詳しく報告している。外間側39名中25名、久高側26名中16名が〈ヤマガミ〉として根神の選定を仰いでいる。

本祭近くなると、もうひとつの注目すべき儀礼がある。〈ヤーノーシ（屋直し）〉は、〈イザイニガヤー〉と〈ヤジク〉の全ての家で行われ、家を祓い清めることによって無事に〈イザイホウ〉が行われるようにとの御願と言われる。比嘉氏はティンユタの西銘カメ氏の〈ムチメー（祈願詞）〉を記録している（資料集収載）。そこでは、「イザイホウのタキ（嶽）の神=〈ウプティシジ〉」と述べられている。〈ウプティシジ〉の性格を如実に示すものと言えよう。

ところで、〈イザイホウ〉の本義については、これまで様々に論じられてきた。

イザイホウは、一定の年齢に達した、島で生まれた女性が、タマガエヌウプティシジという祖霊（？論者）を引き受け、その守護力を背景にヌルを頂点とする祭祀組織の一員となり、シマの守護神の一神となると同時に、夫や息子の守護神的役割を担う有資格者ナンチュに就任する儀式である（資料集収載）。

また、桜井満氏は、イザイホウの中心は第四日目であり、第一の意義は、海の彼方ニライから訪れる神を迎える祭りであると述べる。論者は、〈ヤマの神〉との一体化、そして〈海の神〉を迎える重層的祭祀と考えている。

久高島、生業とイザイホー

竹内重雄

久高島には、他の地域とは大きく異なる特色ある民俗、文化伝承がある。島の歴史、暮らし等の人々の生業を見つめなおすことで祭祀（イザイホー等）の姿が違った形で浮かび上がるであろう。イザイホーの映像からその生業を反映した島人の意識構造がうかがわれるはずである。気づいたままその生業、文化的特徴を示すと以下ようになる。

まず第一に、久高島は王府から太陽神の発祥地、神聖な聖地として位置づけられている。

第二に、王府との関わりの中でイザイホー（神事）が長年にわたって行われてきていたが、イザイホー中にうたわれるティルル（歌謡）には太陽神は現れない。

第三に、久高島の二人のノロ等にかかわる漁労として、女性によるイラブー漁がある。

第四に、500年以上前からと考えられるが、島の男性はサバニを連ねて島外（北は鹿児島近海から南は八重山まで）でイラブー漁を行い、半年以上も島を留守にしていた。

第五に、島の男性がサバニを操って何百キロもの航海をしていたことから、琉球王府は中国との冊封関係・他での操船等に、夫役として久高島の男性を操船役、水主等に使っていた。

第六に、島では他の地域同様、農耕地は地割されていたが、その農作業は男性不在のため、女性たちの手でほとんど耕作されていた。

第七に、沖縄では人が死去することを「唐旅へ行く」と今でも言われるが、男たちの危険な航海に対しての女性たちの「をなりがみ信仰」は根強く、イザイホーのテーマでもある。他の地域の祭祀中にはほとんど出てこないテーマである。

第八に、イザイホーで歌われるうた（ティルル）について、この度の岡田監督『沖縄・久高島のイザイホー』の高精細画像化、録音の明瞭化によりうたの内容も判明が進んでおり、新たな展開が期待される。

*以下に上記の特徴を記した資料を示す。

- 久高島遥拝は、首里王府（太陽神信仰）以外にも玉城の仲村渠のアミシノ御願（旧6月25日）時にヤブサツの御嶽で久高島（ニレーカネー）遥拝がある。王府との対比が明瞭。
- 久高島漁師の王国時代の漁の記録（イラブー以外は捕らないため漁業権問題起こらず）
 - ・ 1788年二月廿五日知念間切久高島之者拾三人、小船六艘ニ乗船、王府御用のエラブウナギを取るために渡海（御手形写抜書）
 - ・ 永良部宇奈貴 久多加島より小船に乗り大小數千尾を取る（『南島雑話』四）
 - ・ (1843年) 永良部鰻魚 當島（薩摩硫黄）…、琉球国人来て多く取る、海水に身を没して手捕にす。（『三國名勝圖繪』）等々
- 久高島漁師は夫役として中国、薩摩藩への操船に従事。「(沖縄県史二巻) 知念間切久高島百姓地之儀、旧藩政中、唐船並御国渡、舸子相勤候ニ付、數百年ノ已前ヨリ該地ニ係

ル貢租免税相成居候」

- イザイホー中のティルルに表れた久高漁師（内容は航海に出た男たちの安全を祈る）。他のティルルとは違って対句・対語の様式が取られていない。

「…にしばいら ぱいにしら/ふぼーりが あいくはた/いとうはきてい うたびみしよーり/うぬとうしぬ いちにんじゅ/みなふみてい うたびみしよーり…」

* 「いとうはきてい（糸掛けて）」は琉歌にみえる表現。糸で導くことで航海を安全に乗り切るようにとの祈念を表す。

- 久高島の地割の特性は、女子労働とそれによる耕地管理・運営。生産物は貢租の対象外。近世封建治下の沖縄本島の農村に普遍的であった強制耕作制はこの島だけは無縁であったといえる。（小川徹「久高島民俗社会の基盤」より）

- 『知念村史』（第二巻 資料編2）から：

- ・ 農業は専ら女が従事し男は全然関与しない。男は家の畑がどこにあるさえ知らない。
- ・ 個人が受ける地割を一地といい、それが十五集まり組となる。組の親は島の祭祀の中心となるが、組は祭祀行事を行うだけの組織だという。……この組は、土地配分の単位であるほかは、農作業上の、たとえば共同作業（ゆい、ユイマール）の単位などではない。組の親（組親クミヌウヤ、女性）は交代制であるが、島の祭祀の中心となり、組ごとに祭祀行事を行うだけである。

- ・ （中国福州に眠るある久高島船頭）その兄弟たちが（その船頭の）遺産のかめ一杯の清国貨幣を元手に馬艦船を建造し福州への初航海に乗り出したが、帰途奄美で船を大破させ、積荷の蘇芳が流出したのか、海一面が赤く染ったという。…（明治13年）

* イザイホー中でうたわれるティルルはオモロ（『おもろさうし』）と類型関係にある。

- ・ イザイホー中にうたわれるニーブトイのティルルは『おもろさうし』のオモロ（第10—554）〔重複オモロは巻第13—868〕の類型歌謡と言えよう。『おもろさうし』中のオモロが民間でうたわれているという報告には、まだ接していない。が、このニーブトイのティルルはあるいは554番、868番のオモロと類歌と想定することができるであろう。そのためには今後さらに研究を深めなければならないが、これまでの諸研究者の報告にはこのような関係を指摘したものはない。

『おもろさうし』には編纂上の都合から同じオモロが何度か出てくるものがある。それを重複して書き表されているために「重複オモロ」という。「類型」の場合は、同一の冊子に重複して出現しているわけではないので重複ではない。よく似た形式の歌謡同士であるので「類型」ということばを用いた。

なお、もう一首のティルル（久高島八月祭りの「ビンヌスイヌティルル」）についても『おもろさうし』のオモロと共通する表現を有するものがある。囃子言葉に「アキマムルル ビンヌスイヌ マイヌチュラサ」とあり、『おもろさうし』（巻第13—825）の「あけまもどろ みれば へにのとりのみゆえ みもん」に対応する。文字を知らなかった島人が耳で聞いてうたったものと考えたと当然変形しているはずである。

『おもろさうし』における「^{あがるいのうぶぬし}東方大主」

ー沖縄久高島の年中行事、イザイホーの映像からの一考察ー

三島まき

『おもろさうし』には、^{あがるいのうぶぬし}東方大主の用例が見られるが、一般的には、太陽神として解釈されている。本発表では、『東方大主』は、抽象的な太陽を神格化した言葉ではなく、沖縄久高島に近年まで存在した久高ノロ（久高ノロは、アガリウプゥヌシの代行という説もある）の受けていた神名である可能性について考察を行なった。

「東方大主」は、オモロにおける27例中、22例は『おもろさうし』の巻一三に集中し、2例は、巻一三の重複オモロで、巻二二に見られ、久高行幸のオモロである。

『おもろさうし』の巻一三は、「船ゑとのおもろ御さうし」で航海にかかわるオモロが収録され、首里のてだこ（国王）やイザイホーのスタイルにも歌われている「あけしの」「国笠の親ノロ」の用例も見られる。

神女「あけしの」を歌ったオモロは、18首の用例があり、「あけしの」も「東方大主」同様、巻一三に集中して見られ、「あけしの」の神名は、「なよかき」であり「なよかき」は、首里大あむしられと指摘されている（注1）。

また、イザイホーの第一日目に久高ノロ殿内では、国笠の根神のセヂをおろすスタイルが唱えられるが、オモロにおける「国笠の親ノロ」の用例（3例）もすべて巻一三に収録され、そのうち1例（巻一三 854）は、^{こぼもり}蒲葵杜、^{こぼもりつかき}蒲葵杜 司がうたわれ久高島のオモロであると理解される。

北村皆雄は、久高島の年中行事のウプゥヌシガナシーの祭りを記録し、これには「ニライウプゥヌシ」を受ける外間ノロと「アガリウプゥヌシ」を受ける久高ノロが収録されている（1978年の映像による。1982年の映像では、久高ノロは欠席）。

本発表では、年中行事のウプゥヌシガナシー（五穀が流れてきたとされる島の東海岸、イシキ浜での祭祀）の映像から、オモロにおける東方大主を考察する参考資料として提示した。

また、北村皆雄は、ピーサアチと八月マティに歌われる「ビンヌスイーナ」（紅の鳥の舞い）と称される映像も記録している。このスタイルについては、外間守善の報告があり、繰り返し部分の「アケマムルル（あけもどろの）ビンヌスイーナ（紅の鳥の）マイヌシュラヤー（舞いの美しさよ）」「夜明けのまだら模様の美しい陽光に照らされ、朱色にそまった紅の鳥の舞う姿の美しさよ」は、オモロに記載された「東方の大主 明けまもどろ 見れば への鳥の舞ゆへ み物 又てだが穴の大主」（東方の大主はうたいます。夜明けのまだら模様に美しい光に照らされた紅の鳥の舞う姿の見事なことよ）（巻一三 825）と同じ内容であると指摘されている（注2）。

「あけまもどろ」という用例は、オモロには、この1例のみで、同じ言葉が、久高島の年

中行事のスタイルに見られるのは、注目すべきことである。

この「ビンヌスイヌ」のスタイルは、八月マティにもうたわれ、ピースァチと八月マティが重要な国家祭祀であったとも考えられる。オモロには、ほかにも「一 東方の大主 日の鳥の 佳声^{かこゑ}の うらうらと 聞ゝ 清らや 又 てだが穴の大主」(巻一三 820) という用例が見られ、オモロ世界や久高島の祭祀歌謡では、日の鳥(紅の鳥、鳳凰)は、重要なテーマとなり、外間守善は、紅の鳥は、首里王府を中心にした神女組織の中で、職制化されたノロの持つ扇子に図案化されていると指摘している。(注2)

岡田一男が制作したイザイホーの映像では、ニブスウイのスタイルが二日目から四日目まで、三日間、繰り返し歌われ、そのスタイルでは、「あけしの」とヤジクたちは、ニライカナイから船を漕ぎ、久高島周辺の岩礁、島の中の御嶽などの聖地、斎場御嶽、与那原、最終的には首里城まで訪れるのである。(注3)

これら北村皆雄の年中行事の映像、岡田一男のイザイホーの映像などを総合的に判断すると、『おもろさうし』の巻一三には、久高島を舞台としたオモロが見られ、それらは王権儀礼に深い関わりのあることが理解される。

本発表では、岡田一男、北村皆雄の映像記録をもとに、収録されているスタイルと『おもろさうし』の内容とを比較し、これらの久高島の映像記録が、『おもろさうし』を読みとき古琉球の祭祀世界を理解するために、重要な手掛かりとなり得ることを指摘したいと考えている。

注1 島村幸一 立正大学文学部学術叢書 03『おもろさうし研究』角川文化振興財団
2017年 p. 118

注2 外間守善「おもろ語「へにのとり」」『沖縄の言語と歴史』中公文庫 2000年
p. 224～ 230

注3 口頭発表 岡田一男 三島まき「シューリィキアシビ(朱付け儀礼)とニブトウイのティルル(神謡) — 「沖縄久高島のイザイホー」1978年撮影、未公開映像記録から —」沖縄文化協会 2023年度公開研究発表会 沖縄国際大学 2023年6月25日

久高島用語解説 (要旨集に出てきた語彙に関して)

アガリウブヌシ ニラーハラー (ニライカナイ) の神。久高島の祭祀でみると、ウブヌシガナシーでは遙拝の対象となり、ハンジャンナシーでは久高島に來訪するニラーハラーの神々の中心となっている。イザイホーでは、本祭四日目のグキ (桶) マーイのスイルルで、アガリトトウブヌシとして謡われている。

アミルシ 久高島の年中行事のひとつ。イザイホーの直前、旧 11 月 13 日におこなわれる。イザイホーの歌謡の中でも言及される祭祀である。新たに就任したスォールイガナシーにとって初漁となる追い込み漁があり、島の男たちは徳仁港にヤルイと呼ばれる仮小屋を七つ作って、豊饒・豊漁の祈願と共食がおこなわれる。かつてはこのヤルイに男たちが夜籠もりし、旧 11 月 15 日まで続いたという。津堅島のマータンコーと類似する点が多い。

アリクヤー イザイホーの本祭四日目におこなわれる神事。藁縄をはさんで、ノロやヤジク達と島の男たちが向かいあっておこなう船漕ぎ儀礼。この時、ノロ達はスイルルを謡い、同時にニブスウィはティリン (鼓、小太鼓) を打ちながら別のスイルルを謡う。

イザイニガヤー 30 歳以上で、はじめてイザイホーに参加する女性。イザイホーを経るとスアマガエーと呼ばれるようになり、ノロを頂点としたイザイホー神女集団に加わることになる。

イラプー ウミヘビ。久高島はウミヘビの産卵地で、それを捕獲し、燻製にしてきた。

ウグワンダティ 御願立。一連の祭祀の最初におこなわれる立願の行事。イザイホーでは、旧 10 月 10 日過ぎの午の日に、ムトゥ (宗家、元家) とウタキを廻っておこなうのが原則。1978 年は羊の旧 10 月 17 日におこなわれ、外間ノロ家から始まって、久高ノロ家、外間殿、シラタル宮、ウブウスタトゥ (ウプラトゥ) 家、ウブンシミ家を巡って祈願したあと、フボーウタキに行き、その他のウタキに関してはそこで遙拝した。

ウプティシジ ウタキには様々な神霊が去来するが、そのウタキ固有の神とされるものをいう。イザイニガヤーはいずれかのウタキのウプティシジを選び、イザイホー終了後は、自宅のトゥパシリの香炉 (通常一番座の庭側に置かれた香炉) でそれを祀ることになる。かつて祖母の香炉で祀られていたウプティシジを継承することが多い。『おもろさうし』ではオボツセチとして出てくる。比嘉康雄は、シジを祖霊とし、ウタキに祖霊神がいると考え、スアマガエーヌ (の) ウプティシジを神女達の守護霊と解釈した。

ウブヌシガナシー 久高島の年中行事のひとつ。ニラーハナー (ニライカナイ) のウブヌシ (大主) ガナシーに対する祭祀。ここでのウブヌシは、イシキ浜の祝詞に従えば、ニラーウブヌシとアガリウブヌシである。いくつかのムトゥ (宗家、元家)、拝所をめぐったあと、イシキ浜で東方に向かって祈願がおこなわれる。旧 2 月におこなわれるものはウグワンダティであり、島の女性は祈願終了後に浜の小石を拾って家に持ち帰る。旧 12 月におこなわれるものはウブクイ (御誇り、御願解き) またはシリガブアー (感謝) で、家に置かれた小石を浜に返すことになる。

ウムイ ⇨スイルル

ウムリングワ 沖縄ではクディングワ、オコデなどと称される。ムトゥ (宗家、元家) や特定の家には固有の神が祀られていることがある。その神を司祭し、時にその神と同一視されることもある神人。イザイホーとは異なり、生まれや霊的能力の有無で認証される。家庭レベルの祭祀をおこなう神人はスィーンユタと呼ばれるが、通常、ウムリングワがその役を担う。

ウメーギ ノロ、ニーガン (根神) の補佐的や役割をする神職者。ウッチュガミ (掟神) ともいう。久高島では、二人のノロと一人のニーガンにそれぞれ一人のウメーギがついたが、1978 年では久高ノロウメーギは不在になっていた。

クジワイ ニーガン (根神) がおこなう米占い。イザイニガヤーは、いずれかのウタキを選び、その神を自分のウプティシジとしなくてはならない。祖母などから継承しない人は、このクジワイによってウプティシジを決めることになる。

スアキマーイ ウタキ (御嶽) 廻り。久高島のウタキを次々と巡って祈願すること。イザイホーではウグワンダティのあとで、日を選んで 7 回おこなわれる。

スアマガエー スアマは神女の美称、ガエーは敬称か。イザイホーによって神女となった女性を指す。70 歳を越えるとスエーヤク (退役) となり、イザイホー神女集団を退任することになる。

スアムトゥ イザイホー神女集団の最上位。60 歳を越えると、神女の段階があがり、祭祀でハブイ (久高ではトウヅルモドキの草冠) を付けることが許されるようになる。

スイルル 久高島の祭祀歌謡の一形式。他にはウムイ、ヘーナ (キューナ) がある。スイルルは立って謡うもの、ウムイは坐って謡うものと区別されることもあるが、厳密に区分することは難しい。

スィーンユタ ティンユタ。⇨ウムリングワ

スォージヤク イザイホー神女集団のうち、ナンチュの一つ上の段階の神女。フバワクでウタキ掃除をするのが最初の仕事になる。スォージヤクからはヤジクと呼ばれるようになり、70 歳を過ぎて退役するまで、イザイホー神女集団がおこなう様々な祭祀に本格的に参加するようになる。

スォールイガナシー 男性の神職者で、2 年の任期で交替する。スアチマンヌワカグラーという、久高島を守護する神を自宅で祀る。ノロとともに久高島の最高の神職者とされており、就任後はノロを含めて誰にも頭を下げてはならないと伝承されてきた。漁に関わる祭祀もおこなうことから竜宮神とされることがある。しかし、スアチマンヌワカグラーは白馬または白馬に乗って登場する神といわれ、竜宮神とはいえない。毎日、この神を自宅の香炉で祀り、10 日目ごとに井戸で禊をし、家を浄める。役割からみると、ヤマトにおける頭屋に近い存在である。

ソーヤク ⇨スォージヤク

ソールイガナシー ⇨スォールイガナシー

タキマーイ ⇨スアキマーイ

タマガエー ⇨スアマガエー

タムトゥ ⇨スアムトゥ

ティルル ⇨スイルル

ナーディキー ナージキ、ナーリキ、名付け。午年の旧 8 月 10 日、八月マティの祭典のなかでおこなわれ

る。15歳から26歳までの男子（12年前のナーディキー以後の世代の男子）が対象になる。各自の屋号と姓をノロ、ニーガンに報告することで、島を支える男子であることが霊的に承認されることになる。これがイザイホーの前に必要とされたのは、イザイニガヤーには必ずそれを支える男の兄弟（実際の兄弟でなくてもよい）が必要で、それが島の男として認められていることが必須だったからである。

ナナマティ マティは、沖縄各地のウマチーと同源で、ヤマトで祭りを意味するマチのこと。久高島の年中行事のうち、麦の初穂祭（旧1月）と収穫祭（旧3月）、粟の初穂祭（旧5月）と収穫祭（旧6月）、コメの神酒を使うウブウマミキ（旧7月）とマーミキグワ（旧10月）、一連の八月行事のうちの一つである八月マティ（旧8月10日）の七つの祭りをいう。

ナンチュ 成り子。イザイホー神女集団の最初の段階。イザイニガヤーがイザイホーを経て巫女になると、ナンチュと呼ばれる。ヤジクとなるための見習い段階の巫女であるが、アラガミ（新神）としての役割も考えなくてはならない。

ニブスウイ ニブトウイ、ニーブトウイ。久高島の男性神職者。年中行事ではノロやニーガン（根神）にニブ（柄杓）を使ってミキを配る役であるが、イザイホーではスィルルの歌唱者となる。

ヌル ノロ（祝女）。久高島には、久高ノロ、外間ノロの二人が祭祀の中心となってきた。二人のノロがいるのは、歴史的な経緯からで、久高ノロは第一尚氏あるいはそれ以前からの古いノロの伝承を持ち、外間ノロは第二尚氏以降、王府に関わる祭祀の中心となってきたノロである。

八月マティ ■ナナマティ

ハンジャンナシー 久高島の年中行事のひとつ。旧4月と旧9月の2回おこなわれる。ニラーハナー（ニライカナイ）の神々が久高島を訪れ、島を祓い清め、豊饒をもたらし、再びニラーハナーへ帰っていく様子が劇のように演じられる。祭祀の中心となるのは、アガリウブウヌシの神を受けている久高ノロ。ニラーウブウヌシは登場しない。ニラーハナーの神を受けているウムリングワは、本祭ではその神が憑依するとされる。ウブウティシジを受けているヤジクたちは、ニラーハナーの神々を出迎え、送る時には、船漕ぎ儀礼にも参加する。供物のハシャキー（平たく作ったおにぎり）は、神々へ供えられると同時に、島の正人（15歳から70歳までの男）一人に一つずつ配分され、豊饒と健康が祈願される。旧9月のハンジャンナシーではその一部でイラブーの豊漁祈願もおこなわれる。

ピーサチ ピーサチ、ヒータチ。久高島の年中行事のひとつ。旧1月または2月におこなわれる。スォールイガナシーがノロに大漁祈願を依頼するという形でおこなわれる。ノロはイザイホー神女集団を引き連れて、カペール（ハビヤーン、久高島の北東端）で豊漁と繁栄祈願のスィルルを謡う。この時、ノロとノロウメーギは、トウズルモドキの束を手にとって、それを何度も岩に打ち下ろす所作をするが、それは魚を追い込む表現だといわれる。

フバワク 久高島の年中行事のひとつ。旧11月、アミルシおよびイザイホーの終了後、日を選んでおこなわれる。冬至の頃、年の切り替りの時期におこなわ

れる祭祀である。フバはクバ（檳榔）のことで、ウタキには多く生えている。フバワクはそれを切り払うことだが、実際にはウタキ掃除を意味し、清浄になったウタキで祈願がおこなわれる。いくつかのウタキでは、船漕ぎ儀礼によって神々を招き、送り返すこともおこなわれる。フボーウタキでは、スォージヤクの就任式、スォムトウの退任式といった、イザイホー神女集団の再編成の儀礼もおこなわれる。ウタキでの神事が終了すると、ウドウンミヤ（御殿庭、イザイホーの主祭場）でスォールイガナシーによるミキヤスクガラスなどのふるまいがある。これは豊饒・豊漁の分配で、一種の大盤振舞いであり、その祈願の意味も含まれている。

マーミキグワ ■ナナマティ

ムチメー 家庭レベルの祭祀で、神人が唱える祈願の言葉。イザイホーでは、イザイニガヤーやヤジクの家でヤーノシーをする時に、スィーンユタが唱える。

ヤジク イザイホー神女集団のうち、ナンチュより上位の段階の神女をいう。狭義でいう時は、スォムトウを除く。

ヤーノシー アサンノシー。家直し。家を祓い、改め、よい状態にすること。家庭レベルの祭祀。イザイホーでは、ウグワンダティのあと、本祭が始まる前までに、イザイニガヤーやヤジクの家でおこなわれる。スィーンユタが、住宅内の火の神、床の神、トウパシリ（通常一番座の庭側）を対象にして祈願する。

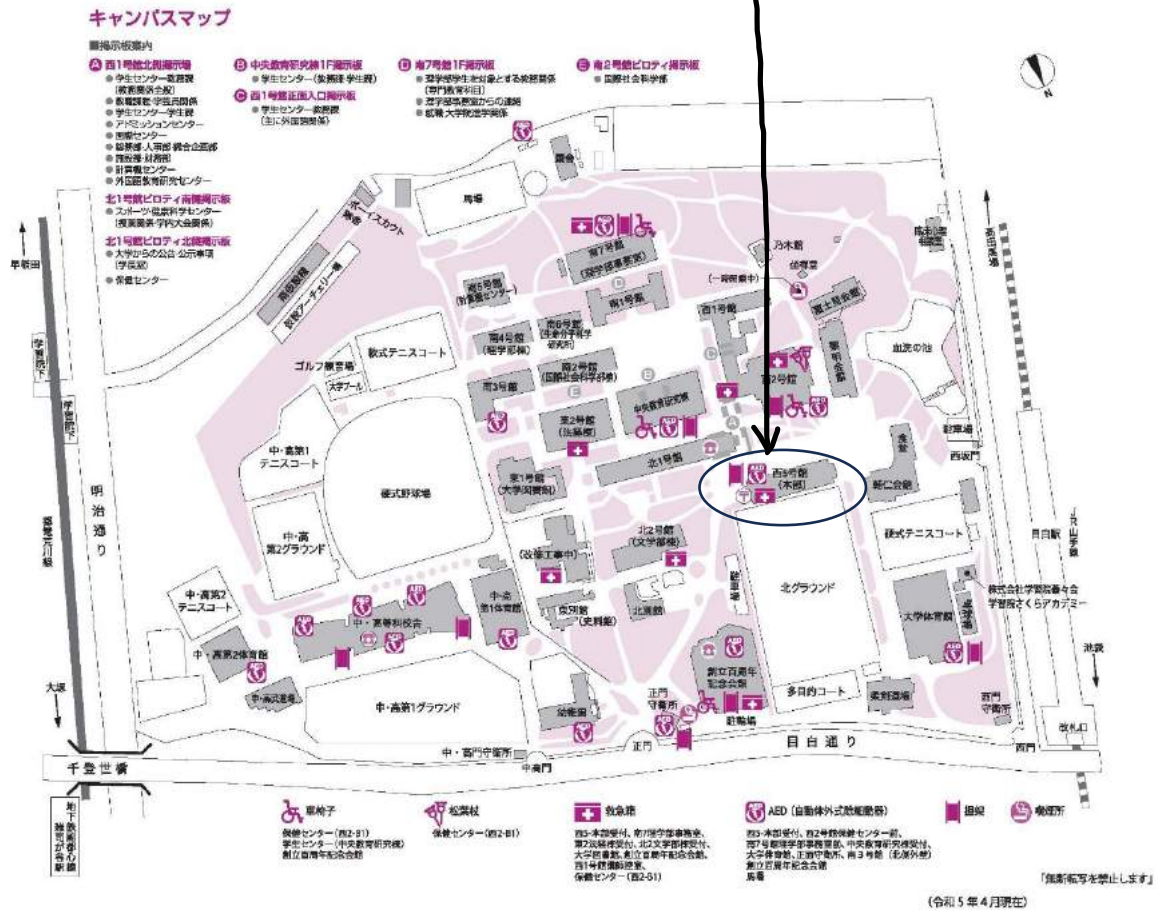
ヤマガミ イザイニガヤーがクジワイで自らのウブウティシジのいるウタキを決めた場合、そのウブウティシジのことを特にヤマガミと呼ぶ。

※久高島方言には、特殊な舌頂音がみられる。サ行とタ行はこの舌頂音で同音になり、区別がつかない。適切にカナで表記することは難しく、従来、サ行、タ行、ラ行で代用されてきた。ここでは福治・加治工〔2012『久高島方言基礎語彙辞典』法政大学沖縄文化研究所〕に従い、スア、スイ、スウ、スエ、スオと表記する。

※1978年の状況は、比嘉康雄『神々の原郷 久高島』上下（1993年、第一書房）による。

文責：乾

学習院大学キャンパス案内図（会場、西五号館）



会場 学習院大学 西5号館 202教室（大学住所：東京都豊島区目白1-5-1）
 （アクセス：図の右下の JR 目白駅改札口を出て、右方向すぐ。西門守衛所を入り北グラウンドに沿って進むと、左手西5号館（本部）に出る。その2階。202教室）

沖縄文化協会（『沖縄文化』編集所）

〒 903-0815 沖縄県那覇市首里金城町3-6

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 鈴木耕太研究室気付

連絡先

2023年度沖縄文化協会東京支部シンポジウム実行委員会

〒 224-0012 横浜市都筑区牛久保1-20-12 竹内方

tel 080-5517-8020